

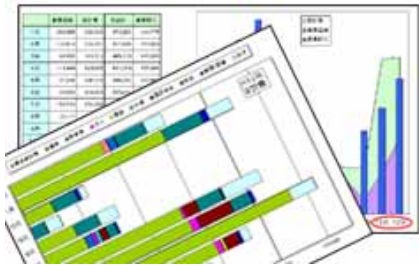
普及活動情勢報告（平成19年10月分）

みんなで「土佐鷹」の技術を高めよう



「土佐鷹」ナス現地検討会（芸西10月1日、5戸）と中芸への視察研修（安芸10月9日、6戸）を行った。両地区は「土佐鷹」の導入年数が浅く、先進地区の栽培技術に追いつこうと開催したもの。会では8月以降高夜温が原因で、①灌水量が例年以上に多く徒長傾向にある。②ナスの裂果や花痕部の傷が目立つことなどを振興センターの担当者が報告した。また、会では竜馬と「土佐鷹」の摘葉、樹勢判断法の違いや篤農家の樹づくりについてJAや農家同士の意見が交わされた。会の開催を農家自らが要望してくる雰囲気は両地区では生まれている。

農業経営改善支援活動が進行中



過去1年間の月別のお金の動き（売上、経費、家計費）を掴んで、具体的に目標設定

様々な原因により経営状態の厳しい農家が増える中、JA土佐あきが栽培技術の重点指導等により経営改善が見込まれる農家を対象とした経営支援活動を本年度から実施している。現在3支所・8人の農家を対象に、JA支所長が中心となって農家の実態把握から経営分析、対策の検討、農家との課題共有及び経営改善目標の設定等の取り組みが行われており、振興センターは事務局であるJA本所とともにこれらの活動を支援している。

まだ実施手法も手探り状態ではあるが、これまでの活動から農業経営面だけでなく家計面も含めた情報収集や分析が事前に必要であることなど、徐々にノウハウが蓄積されてきている。

引き続き、各農家の経営改善実施状況を確認しながら、農協の取り組み活動を支援してゆく。

ユズ果汁搾汁率アップに向けて、北川支部臨時総会開催



北川村役場、JA、JAユズ部会、振興センターが、9月に村内6カ所で行ったゆず王国復活に向けた地区座談会の中で、農家から搾汁工場での搾汁率の低さが指摘された。

これを受け、10月5日、部員86名が出席し柚子部北川支部臨時総会が開かれた。会議では、搾汁率の向上、安心・安全な果汁生産のため、新しい搾汁ラインの建設について審議された。その中で、農家負担などの質疑が行われたが、搾汁ライン建設に向け協力して進めていくことになった。

土着天敵で害虫駆除しよう



天敵を探しに夢中の生産者

安芸地区では在来天敵活用による活動が活発にしている中、室戸地区でも、10月12日、JA土佐あき室戸支所なす部会（4戸）の研究会が開かれた。部会は収量16tを目標に活動しているが、その目標達成にはIPM防除体系の確立が必要である。そこで、今回は農家からの要望が高かった在来天敵による害虫防除について研修を行った。

会では、振興センターから在来天敵の種類や特徴、安芸地区の取り組み事例（温存ハウス、土着天敵リレー等）を紹介後、土着天敵（クロヒョウタンカスミカメムシ）の捕獲を体験した。「アリみたい」「これは？」という声が聞こえる中、必死に探していた。

近年、薬剤抵抗性を持ったアザミウマ類等の被害が著しいが、一部で土着天敵が自然発生している圃場もみられている。今後は展示図を設置するとともに、成功事例を積み上げていきたい。

ユズ収穫にむけて、東川支部研究会開催



10月15日、収穫前の研究会が行われた。朝9時に藤内ユズ団地に約30名が集まり、参加者の園地を中心に今年の作柄を確認しあった。「今年は、黒点病が少ないようだが、日焼け果が多く、来年はどうにかせないかんねえ」とか、大井部落のシカの被害状況をみて、これからの対策の必要性を感じてもらった。3時から、出荷目慣らし会もあり、74名の農家が集まり、収穫前後の管理などについての勉強会が行われた。